

英国図書館研修報告： スペシャルコレクション担当の視点から－

くらもち たかし
倉持 隆
(三田メディアセンター)

はじめに

筆者は2015年9月から12月までの約3ヶ月間、英国東部ノーフォーク州ノリッジ（Norwich）にあるセインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館を拠点として、英国を中心とした研究図書館における研修の機会をいただいた。慶應義塾大学メディアセンターの英国図書館研修は2012年より始まり、筆者で4人目となる。この研修の最大の特徴は、慶應からの派遣者が一方的に学ばせていただくだけでなく、訪問先である英国の日本語資料を所蔵する研究図書館において必要とされている業務支援を行うことによって、派遣者と研修受入機関の両者にとって得るものがある研修となっている点にある。今回の研修においても上記のような観点に基づいて、事前に研修目的を策定した。今回は筆者が三田メディアセンターにおいて貴重書やアーカイブ資料を管理するスペシャルコレクション担当であることから、その分野での内容を加え、以下のような目的のもとで研修に取り組むこととなった。

- ① 英国内に存在する日本語資料を所蔵する大学図書館等を訪問し、日本語コレクションに関する支援を行う。
 - ② Japan Library Group（英国における日本関係資料を持つ図書館のグループ）の活動を通じて、海外における日本語資料の収集や利用傾向、研修支援体制について理解し、慶應の事例も紹介しながら情報交換を行う。
 - ③ 英国研究図書館における日本関係資料の所蔵状況について理解を深める。
 - ④ 英国研究図書館におけるスペシャルコレクションの保存や利活用の現状について知見を得る。
- 具体的な訪問先と日程は図1のとおりである。本稿においては、スペシャルコレクション担当の視点から取り組んだ英国図書館研修の報告を行いたい。

研修日程	訪問・見学先
9/7～12/10	リサ・セインズベリー図書館
9/9～9/11	ケンブリッジ大学図書館
9/16～9/19	日本資料専門家欧州協会会議（EAJRS）Annual Conference（オランダ・ライデン大学）
9/27～10/2, 12/2～12/4	オックスフォード大学ボドリアン図書館 附属日本研究図書館
10/14	大英博物館
10/14	ウェルカム・ライブラリー
10/26～11/6	大英図書館
11/4	Japan Library Group Meeting
11/19～11/25	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）
11/25	National Archives
12/1	NACILA Conference
12/8～12/9	チェスター・ピーティアー・ライブラリー（アイルランド・ダブリン）

図1 訪問・研修先一覧

1 本研修の成果

最初に研修全体の成果をまとめることとしたい。まず、英国の大学図書館等における日本語コレクションに関する支援としては、スペシャルコレクション担当で古典籍や古文書を整理してきた業務経験を活かして、日本古典籍の目録作成に関する支援を行うことができた。具体的な内容は後述するが、オックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館（以下、ボドリアン図書館）、リサ・セインズベリー図書館、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（以下、略称のSOAS）、大英図書館、Japan Library Group等において、古典籍目録作成の支援を行った。また、SOASにおいては、くずし字解読の支援も行った。

一方、英国図書館研修で学べたことは大きく分けて2点ある。1点目は英国やその他の訪問先における日本関係資料の所蔵状況を知ることができた点で

ある。多数の現物資料を閲覧しながら、海外で所蔵されている日本の古典籍・古文書について理解を深めることができたことは非常に大きな経験となった。2点目はスペシャルコレクションの保存、利活用に関して、見聞を広めることができた点である。資料の保存、閲覧提供、展示、広報活動など、多岐にわたる事例を知ることができ、今後の業務改善に向けたアイデアやヒントを得ることができた。

2 訪問先での研修内容

では、上述のような成果を得ることができた今回の英国図書館研修について、訪問先ごとに具体的な研修内容を報告していきたい。

(1) 英国内での訪問機関

まず、英国内で訪問した機関での研修内容を報告する。

a リサ・セインズベリー図書館

約3ヶ月の英国滞在中、他機関を訪問していない期間はリサ・セインズベリー図書館において日本古典籍の整理作業を担当した。リサ・セインズベリー図書館では、元駐日大使サー・ヒュー・コートツィ夫妻より寄贈された江戸時代の絵本類を中心とする和本のコレクション33タイトル50冊を所蔵している。三田メディアセンターで和漢の古典籍目録用に使用しているデータシートに書誌情報を記入するところから作業を始め、NACSIS-CAT、ALEPHへの書誌データ登録の後、資料を中性紙封筒・中性紙箱に収める装備作業まで行った。一つのまとまりあるコレクション資料について、目録から装備・配架まで、一連の整理作業を担当することができ、大きな達成感も得ることができた。



図2 リサ・セインズベリー図書館での和装本整理

b ケンブリッジ大学図書館

ケンブリッジ大学では、研究資料は大学図書館に集められ、教育用の資料は各学部図書館に所蔵されている。日本古典籍は大学図書館の日本部で管理され、約2,500点が所蔵されている。オランダ商館付の医師として江戸時代に来日したシーボルト、『一外交官の見た明治維新』の著者として知られるアーネスト・サトウ、幕末に外交官として来日し、後に日本研究者に転じたアストンなど、日本とゆかりの深い人物の旧蔵コレクションを中心に日本古典籍を閲覧させていただいた。また、日本学を学ぶことができるアジア中東学部の図書館も見学し、大学図書館と学部図書館との違いも知ることができた。また、大学図書館に併設された展示室も見学した。



図3 ケンブリッジ大学図書館

c オックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館

ボドリアン図書館では、和古書が約600点(約1,000冊)所蔵されており、ここでもアーネスト・サトウが旧蔵者に名を連ねている。浦島太郎などの奈良絵本、歴史資料として徳川家康の朱印状も所蔵している。ボドリアン図書館は2度訪問し、主として古典籍目録作成の支援を行った。約80タイトルの現物確認を行ったが、書誌事項をチェックしながら、貴重な和書を1点1点詳しく見ていく作業は筆者にとって非常に楽しく貴重な経験となった。

スペシャルコレクションに関しては、2015年に貴重書や写本等を集中的に管理し、60名規模の閲覧室を3室有するウェストンライブラリー(Weston Library)が開館した。展示室・講演用ホールも有するこの貴重書図書館はスペシャルコレクション利活用のための代表的な施設であり、その充実ぶりに

驚嘆を覚えた。



図4 ウェストンライブラリー
一番奥に展示室入口がある。

d 大英図書館およびJapan Library Group

大英図書館では、Japan Library Group（以下JLG）¹⁾のミーティング（JLGは約20機関が加盟し、年2回のミーティングを行っている）に合わせて開催された古典籍ミニワークショップを担当した。滞在中は主にワークショップで使用する古典籍を大英図書館の蔵書から選び、現物を調査しながら準備を行った。古典籍ミニワークショップでは、加盟機関の中で、特に日本古典籍を扱っている司書の方を対象とし、事前に目録作成上困っているトピックをあげていただき、刊行年、出版者、合冊の各巻の見分け方（英国で所蔵される和装本は、各巻の表紙をとって合冊され、ハードカバー製本されているケースがある。）等について日本語で解説した。大英図書館では、約3,600点に上る古典籍を所蔵しているが、その蔵書の中から、事前に説明に適した資料を調査し、奈良絵本（絵巻）やケンペルが持ち帰った絵地図など、貴重書級の資料も参考資料として使わせていただき、その蔵書の充実ぶりを肌で感じることができた。また、同日の午後に開催されたJLGのミーティングにおいては、慶應の事例紹介として、スペシャルコレクション担当について、資料の利活用を中心に英語で発表を行った。

展示については、大英図書館でも特別展示室、常設展示室、展示スペースの3ヶ所の展示を見学した。展示室は展示担当セクションが管理し、館内展示を含む展示出品前後の資料状態面でのチェックも厳密に行われているという点が特に印象に残った。



図5 大英図書館正面玄関のパブリックスペース
アリスに関する展示の案内が置かれている。

e ロンドン大学アジア・アフリカ研究院（SOAS）

古典籍の所蔵は約300点（うち写本は32点）、他に浮世絵も多数所蔵している。代表的な古典籍（絵本や写本）を閲覧して書誌をNACSIS CATに登録するとともに、日本人研究者の浮世絵閲覧準備を担当した。また、筆者が日本史の博士課程出身で、古文書目録作成の経験が長いことから、SOASの日本研究者向けにくずし字を読むための講習会を依頼された。講習会の企画は大変であったが、英国における日本研究者の熱心さを直接感じるとともに、母国語が日本語でない人がくずし字を学ぶ苦労も知ることができ、大変貴重な経験となった²⁾。

展示については、東南アジア・ブルネイ国王の寄付により1995年に建設されたブルネイギャラリー（Brunei Gallery）を見学した。SOASの所蔵資料を展示する常設展示室のほか、外部貸出用の展示スペースが3ヶ所あり、内容や目的に応じてバラエティに富んだ展示が行われていた。



図6 ブルネイギャラリー外観

その他、英国においては大英博物館、ウェルカムライブラリー（Wellcome Library、世界最大の医学関係独立系研究基金であるウェルカムトラストのコレクション）でも日本の古典籍を閲覧し、英国における日本古典籍収集の裾野の広さを感じることができた。

(2) 英国外での訪問機関

続いて、筆者が慶應からの派遣者として初めて訪問した英国外の機関について報告したい。

a EAJRS会議とライデン大学図書館

昨年に派遣者に引き続き、日本資料専門家欧州協会（EAJRS）の会議に参加した。2015年はシーボルトが収集した資料が数多く保管され、日本とも縁が深いライデンでの開催ということもあり、北米・日本からの参加者も含め史上最多の120名が参加した。Breaking Barriers — unlocking Japanese resources to the worldという大会テーマのもと、4日間で32の発表がなされ、活発な議論も行われた³⁾。会議のスケジュールにライデン大学図書館、シーボルトハウス（博物館）の見学も組み込まれており、古典籍、古地図といった紙資料から道具類や動植物の剥製に至るまで、シーボルトが集めたあらゆる日本関係資料を見学することができた。ライデンで所蔵されている日本資料は質、量ともに一級品であり、広く海外全般における日本資料の所蔵状況を理解する上でも、非常に有意義な訪問となった。

b チェスター・ビーティー・ライブラリー（CBL）

研修の最後にアイルランド・ダブリンにあるCBLを訪問した。鯨山王であったアルフレッド・チェスター・ビーティー卿のコレクションを収蔵したCBLは1954年に開館し、2000年に現在のダブリン城の一角に移っている。特にイスラム、インド、日本、中国の美術品を多く所蔵し、日本関係では奈良絵本の善本を多く所蔵していることで知られる。図書館といっても博物館・美術館に近い機関で、充実した展示室で多くの資料が公開されており、平日でも見学者が非常に多いことに驚いた。ここでは、竹取物語絵巻、源氏物語絵巻など、代表的な奈良絵本・絵巻を閲覧させていただいた。

3 英国図書館研修を通じて感じたこと

以上のような研修内容を踏まえ、研修全体を通じて感じたことをまとめることとしたい。

(1) 英国研究図書館が必要としていること

英国の研究図書館においては、一人もしくは少数の担当者で日本資料を担当されていることもあり、古典籍の目録作成が課題となっているとのことであった。今回、研修を通じてこの分野で支援をする機会をいただいたが、少しずつでも継続的に支援していくことがメディアセンターとしての国際貢献にもつながると感じた。

また、日本語資料のデジタル化についても根強い要望があった。貴重書や和装本、浮世絵、絵本等の美術関係資料のデジタル化の要望があるとともに、まだデジタル化が十分でない人文社会科学分野の学術雑誌のデジタル化を求める声が多かった。海外における日本研究の熱を冷まさないためにも、これらのデジタル化は喫緊の課題であるといえよう。

(2) 英国所在の日本古典籍の所蔵状況

英国における日本古典籍の所蔵に関しては、2つの特徴があると感じた。1点目は日本とヨーロッパの交流の歴史により蔵書が形成されている点である。ケンペル、シーボルト、アーネスト・サトウといった日本史の教科書に登場する人物たちが日本から持ち帰った資料が膨大に伝存しており、伝統ある研究図書館では、これらの人物が収集した資料がコレクションの中核となっていた。2点目は図版を含む資料が多い点である。これは日本語がわからなくても絵に描かれた美術的な美しさが伝わるからであろう。なお、本研修で得た古典資料に関する知見については、『大学図書館研究』106号に別稿を掲載する予定である。

(3) スペシャルコレクションの利活用

まず印象に残ったのは、設備の充実ぶりである。大英図書館、ボドリアン図書館、ケンブリッジ大学図書館などの貴重書閲覧室は、その広さに圧倒された。これは日本の貴重書閲覧室は、比較的狭いスペースで利用者数も限定的であるのに比べ、対照的である。但し、広いスペースである分、閲覧室への入室チェックが厳重に行われ、資料保護に慎重を期

している点は日本と共通している。閲覧室の工夫で印象に残ったのは、大英図書館のアジア・アフリカセクションの閲覧室である。大英図書館はリーダーズパス所持者に対しては、ウェブで貴重書級の資料の閲覧予約もできる仕組みになっているが、一部のウェブ予約不可の指定資料は赤、写真撮影禁止資料は黄色、写真撮影可能な資料は緑といったように閲覧席に色分けした札が置かれ、重要な資料ほどカウンターから近い閲覧席で見よう指定されていた。閲覧者の動きを監督しやすい配置は、利用者の利便性と資料の保護のバランスを保ったものとなっている。

展示による資料公開も積極的に行われていた。多くの研究図書館に本格的な展示室が設置され、専任の展示担当者により、展示前後の資料のチェック体制も構築されていた。温湿度管理も無線で集中管理している図書館もあり、展示の面でも公開と資料保護のバランスが保たれていた。

展示公開以外の利活用としては、授業への活用はそれほど盛んではない様子であったが、これは大学の授業期間に集中的に課題が出されるカリキュラムが影響しているのではないと思われる。一方、英国における貴重書利活用の媒体として、一つの潮流であると感じたのがブログである。実例としては、SOASと大英図書館の例があげられる。SOASのArchives & Special Collectionsでは、さまざまなコレクション資料をブログで積極的に紹介し、大英図書館でも部門ごとにブログを持ち、資料紹介を中心とした情報発信を行っていた。スペシャルコレクション利活用の一例として、大変参考になった。

おわりに

最後に本研修での経験をもとに、今後の展望を記して本稿のまとめとしたい。

第一に、慶應義塾大学メディアセンターとして、日本研究分野、日本関係資料を通じた国際交流・貢献ができる可能性を感じた。スーパーグローバル事業に代表される大学の国際化時代において、英語による発信が重要であることは言を俟たないが、海外の日本研究者や日本関係図書館に向けた日本語による発信・支援もまた重要ではないだろうか。今後は、古典籍目録などの分野でメディアセンターが蓄積してきたノウハウをもとに、日本語による国際貢献も

行っていく必要があると感じた。

第二に、海外で活躍されている図書館員の方々と接する中で、その絆の強さを目の当たりにし、人的なネットワークの重要性を改めて感じた。今後、メディアセンターとして国際的な交流を継続していく上で、組織同士の関係とともに、個人の信頼関係も大切にしていきたい。

第三に、今回英国で見聞したスペシャルコレクションに関する事例は、資料保存と利活用のバランスが両立されている点に特徴があると感じた。資料保存と利活用の両立は、重要かつ難しい課題の一つである。今回得られた事例やアイデアを今後のスペシャルコレクション業務の改善に生かしていきたい。

最後に、今回の研修全般をコーディネートしてくださったセインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館の平野明さんを始めとする英国の図書館員の皆様、事前研修を担当していただいたメディアセンター本部の方々、展示業務が多忙な時期に長期間送り出してくれた三田メディアセンターのスタッフに心より御礼申し上げたい。

注・参考文献

- 1) Japan Library Group
<http://www.jlgweb.org.uk/> (参照 2016-11-04)
- 2) 倉持隆. イギリスでくずし字を読む. 知識の花弁 三田メディアセンターだより. 2016. No.7, p.7.
<http://www.mita.lib.keio.ac.jp/guide/publication/j7aliq0000000rli-att/chishikinokaben2016spring.pdf>
(参照 2017-01-31)
- 3) EAJRS LEIDEN 2015
<http://eajrs.net/conferences/leiden-2015>
(参照 2016-11-04)